

理念

私たちは、これまで自らが選んだ地域で、社会の支援を得ながら暮らしてきました。どんなに重い障害を持っていても人として生きてゆくこと、障害者として自らが必要とする支援を知っていることは、地域での生活を実現する上で大切でした。

私たちは、多くの先輩障害者が、長い年月をかけて地域での自立した生活を求め続けてきたことを知っています。その活動の多くは自立生活センターが中心となり社会的役割を担ってきたように思います。私たちもまた、地域での生活を選んだ際、必要とする支援を考える際に、自立生活センターで活動する障害者からあらゆる支援を受けてきました。

一方で私たちは、この社会において、障害者本人の主体性を奪う行為でさえも支援として行われていることも知っています。それは私たちが必要とする支援とは、おおよそかけ離れているように感じるものであり、これは障害者が「保護されるべき人」「劣っている人」「何もできない人」と理解され、本人以外の専門家によって判断され作られてきたからです。こうした歴史に由来する事実は消し去ることができません。ただ、変えていくことはできます。

障害者の専門家は障害者です。どんなことがあろうと自らが判断し、自らが決めることを誰にも譲りません。障害を持って生きてきた経験はその人固有のものであり、本来誰一人としてそれを変えようとすることはできません。障害者に対するレッテルは、その本人を無力に落とし入れるものでしかなく、誤ったレッテルは、本人以外の専門家に力を与えることを容易にします。貼られているレッテルを無批判に受け入れることはしません。

私たちは、自らを障害者だと名乗りはじめた訳ではありません。学校で勉強するため、働くため、地域で生活する上で、障害者と名乗ることにどんな意味もありません。しかし未だに、障害者と名乗ることを強要され不合理な取り扱いを受けています。私たちは、この社会で人が享受するすべての権利を、障害者としてではなく人として同じように持つことを目指します。

それらを、自己信頼の回復と人間関係のつながりを目的とする「ピア・カウンセリング」、食事・調理・金銭管理、介助者の使い方など生活上のノウハウを伝える「自立生活プログラム」を中心として、また自分の生活のため、すべての人のために必要となる行政交渉を進めていくことで可能にしていけます。

私たちは、この活動をつうじて、現在の障害者を支援していくと同時に、歴史の通過点として、未来の障害者運動を担ってゆきたいと思います。それは、私たちの活動をつうじて共感をしてくれる仲間を見つけ、育て、彼らが障害者の立場にたった支援ができる主体者となることで、その責任を果たしたいと考えているからです。

2008年4月1日
自立生活センターアークスペクトラム